マンガに教わる仕事学

梅崎 修
Umezaki Osamu

CHIKUMA SHINSHO

……職場を舞台にしたマンガは、たとえそれが創作であっても仕事に関する等身大の経験が描かれている。われわれは、職場に生まれる願望、苦しみ、喜び、誇り、後悔などを作品の中から読み解けるのである。それが、マンガをテキストにして仕事学を語る理由である。……

ちくま新書
585

ちくま新書
585

マンガに教わる仕事学

二〇〇六年三月一〇日　第一刷発行

著　者　梅崎修（うめざき・おさむ）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前二-五-三　郵便番号一一一-八七五五
振替〇〇一六〇-八-四一二三
装幀者　間村俊一
印刷・製本　株式会社精興社

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。
ご注文・お問い合わせも左記へお願いいたします。
〒三三一-八五〇七　さいたま市北区櫛引町二-六〇四
筑摩書房サービスセンター
電話〇四八-六五一-〇〇五三
© UMEZAKI Osamu　Printed in Japan
ISBN4-480-06290-4　C0236

ちくま新書

マンガに教わる仕事学

梅崎 修
Umezaki Osamu

585

マンガに教わる仕事学【目次】

プロローグ——仕事学事始　007

第1章　自分の仕事を探している若者に読んで欲しいマンガ　017

1　「SHOP自分」に教わる「自分病」からの脱出法　019
2　「まいど御愁SHOW様!!」にみる本気体験の大切さ　023
3　「ラーメン発見伝」にみる〝仕事の発見〟　027
4　「がんばるな!!!家康」にみつけるがんばる理由　031
5　「希望の椅子」にみる理想の就職とは？　035
6　ナカやんにみる自分の仕事のつくり方　039
7　「味いちもんめ」にみる職場体験の価値　043
8　金太郎に教わる自分の言葉の鍛え方　048

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第2章 会社の現実にぶつかったら読みたいマンガ 053
1 「係長ブルース」にみるしんどい仕事の現実とは？ 055
2 「OL進化論」に学ぶ会社の楽しみ方 060
3 ハナコさんに教わる新人育成法 064
4 「築地魚河岸三代目」に教わる仕事を面白がる心 068
5 「壁ぎわ税務官」に教わる身近な教師の大切さ 072
6 笑介から教わる失敗から学ぶ方法 076
7 「ナニワ金融道」にみる厳しい自己責任 080
8 「働きマン」に学ぶ頑張る格好良さ 084
第3章 会社の人間関係が複雑になってきたら読みたいマンガ 089
1 「怪傑!!トド課長」にみつける理想の上司 091
2 「人事課長鬼塚」に教わる部下を慮る心 095
3 「ギラギラ」に教わる同僚とのつきあい方 099

4 山口六平太に学ぶ〝目立たないリーダーシップ〟 103
5 「この女に賭けろ」にみる働く女性の本当の強さ 107
6 「重役秘書リナ」に学ぶ職場づくりの秘訣 111
7 平並次郎に教わる大きな組織の動かし方 116
8 「お仕事です！」に教わる本当の組織のつくり方 120

第4章 会社以外の生活を考えるために読みたいマンガ 125

1 〝浜ちゃん〟に学ぶ余暇の過ごし方 127
2 「酒のほそ道」に学ぶリラックスの方法 131
3 「ベル・エポック」で学ぶ恋愛も仕事も手に入れる方法 135
4 「クッキングパパ」に学ぶ家庭と仕事の両立 139
5 「のんちゃんのり弁」にみる〝好き〟を仕事にする苦労！ 143
6 タンマ君に教わる会社の遊び方 148
7 「ぽっかぽか」にみつける幸せのかたち 152
8 「ウッシーとの日々」に教わるシンプルライフの充実感 156

第5章 仕事人生を振り返るときに読みたいマンガ 161
1 「部長 島耕作」に学ぶ人生のエンディングプラン 163
2 「定年諸君！」にみる二周目の人生 167
3 Dr.コトーに教わるスローな働き方 171
4 「プラネテス」にみる〝大きな仕事の小さな発見〟 175
5 柳沢教授が講義する人生の主人公になる方法 180
6 「きらきらひかる」で知る仕事が与えてくれるもの 185
7 「夏子の酒」に教わるライフワークの探し方 190
8 「寄席芸人伝」にみる仕事の一本道 194
エピローグ——隠されたキャリア教育の可能性 199
あとがき 203
参考マンガ一覧 207

プロローグ――仕事学事始

†なぜ、マンガを取り上げるのか?

この本では、仕事学のテキストとして四十作品のマンガを取り上げ、そこで描かれている四十人の主人公たちが歩む仕事人生を読み解きたい。

読者の中には、なぜマンガなのか、と不思議に思われる人がいるかもしれない。

たしかに書店の棚を眺めると、多くのビジネス書が並んでいる。それらの書籍は、最新の経済環境に解説を加えながら将来の見通しを、時には悲観的に、時には楽観的に論じている。

ビジネス書の読者は大忙しである。ある本で経済環境の大変化が悲観的に語られれば、その大変化に乗り遅れないために、慌てて職場のノウハウを身につけなければならない。ありがたいことに、ビジネス書はその答えを用意している。それぞれの本は「我こそが正しい」と自説を主張しているのだから、読み手はたくさんのビジネス書を読み比べる必要

がある。

そんなに多くのビジネス書を読む暇がない、もしくは読むには読んだがノウハウを身につけるのは間に合わないこともある。そんな時は、慌てず、楽観的な見通しのビジネス書を読めば安心というわけ。どうどう巡りである。

……結局、どうすればよいのだろうか？

また、ビジネス書では筆者の成功体験が自慢げに主張されることが多い。「自分はこうして成功した。だから、あなたも同じようにしてみたら」という発言がなされる。でも、他人の経験がどこまで自分に当てはまるのだろうか。私ならば、誰にでも当てはまるような「解答」はないと開き直ってやりたい。

しかし、その種の本は止め処なく刊行されているのだから、「解答」を求めたいという潜在的願望は広がっているのだろう。そして、その願望はお手軽に満たされないから、失望することになり、自信を失うのである。結果、新しい本が新たな「解答」を主張することになる。

この連鎖を断ち切るために、この本では、少し回り道をしてみたい。私がこだわっているのは、経験というありふれた言葉である。

自分の成功体験を語る人は、行動第一主義者でもある。「仕事は、とにかくやってみれ

ばよいのだ。経験しなければ本質はわからないのだ」という主張は、たしかに説得力を持っている。

ところが、成功者たちの発言は、自身の経験に裏打ちされているので説得力はあるのだが、多くの場合、読者は成功者に憧れるだけに留まってしまう。それでは、何かを学ぶことに繋がらないのである。実際、ある成功体験を「解答」だと思ってしまった時点で、学ぶという行為は消滅してしまう。

もちろん、その一方で他人の経験から大いに学べる人もいる。経験を「解答」として凝固させずに、経験を自らが独自に考えるための「素材」として活用できる人である。学べる人と学べない人の差は大きい。

われわれが考えるべきは、何を学ぶかではなくて、どうやって学ぶかなのである。言い換えれば、学ぶべきことを知る前に、学ぶ方法を知る必要がある。

しかし、この学ぶ方法を教えることは学ぶべきことを教えるよりも至難の業である。まず、学校のように、どこかの誰かが「解答」を持っているという幻想を捨て去ることが肝心だ。そのうえで経験から何かを感じ取るヒントを見つけなければならない。

はじめに大局が語られ、続けてサラリーマンのあるべき姿が描かれているビジネス書を読むだけだと、職場の仕事経験を踏まえた多様な学びの可能性がなくなってしまう。結局、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

実際の仕事経験を抜きにした議論に終始してしまう。

職場を舞台にしたマンガは、たとえそれが創作であっても仕事に関する等身大の経験が描かれている。これらの経験から学ばない手はないだろう。また、マンガには職場の細々とした日常が描かれているので、われわれは、職場に生まれる願望、苦しみ、喜び、誇り、後悔などを作品の中から読み解けるのである。それが、マンガをテキストにして仕事学を語る理由である。

†三つの職場

私も、たった一回の仕事人生をゆっくりと歩んでいる人間である（むろん、すべての仕事を経験した人なんて存在しないのだが）。読者に誇るべき希少な仕事経験を持っているわけでもない。

そんな経験不足の私が、あえて経験を活かす仕事学と称して読者に語りかけたいと思っている。本当のところ、大変難しい試みである。そこで私は、この本を書くにあたって、三つの職場をできる限り想像してみることにした。

第一は、当然、マンガの中の職場である。登場人物たちにとことん感情移入しながら、彼ら彼女らの立場から職場を眺めてみた。そして、主人公たちにインタビューをしている

つもりで彼ら彼女らのセリフを読んでみた。

第二に、現役社会人たちの様々な職場を想像してみた。読者となってくれる人たちは、どんな職場でどんな仕事をしているのだろうか。そして、どんな悩みを抱えて、どんな夢を抱いているのだろうか。読者と一緒に仕事学を学ぶためにも、私は具体的な職場を想像してみた。

第三の職場に関しては、想像するという言い方は正しくないが、自分自身の職場を改めて振り返ってみた。自分が実体験したことが他の職場で働く人たちにも共有してもらえるかを、つねに思いながらこの文章を書いている。

仕事の世界は、多様な経験が積み重なった意味の世界である。数字で割り切れたり、頭でっかちに机の上だけで議論したり、簡単にノウハウにしたりすることはできない。それゆえ主人公たちの仕事経験の一つ一つを丁寧に読み解く必要がある。

†不安の正体とは?

ところで、マンガの世界から仕事学を教わる前に、どうしても近年における雇用環境の変化について触れないわけにはいかないだろう。

たとえば、サラリーマンの長い仕事人生について考えるとき、昔よりも今の方がサラリ

ーマンとその予備軍が抱える不安が大きくなってきていることは事実だ。
私は、このことをことさら強調し、むやみやたらに不安を煽るようなことはしたくない。しかし、だからといって、多くのサラリーマンが抱えている戸惑いの感情が小さな問題であると言うつもりもない。
たとえば、景気さえよくなればそんな不安は解決するという意見がある。しかし、この言い方は、仕事さえあれば、もしくは給料さえ高くなれば、満足して働くだろうという勝手な思い込みと同じである。
事態はそうそう単純ではない。その不安の正体は、職場環境の変動とそれに伴う仕事人生における見通しの悪さと関連している。現在、自分の将来像が具体的に想像できなくなっているのである。
労働経済学者の玄田有史氏は、その見通しの悪さから生まれる不安を「曖昧な不安」と呼んだ。現代の若者たちの中に、不確実な世界が広がっているというのだ。
若者の心理には、将来の問題が拡大された形で現れる。若者たちには、やりたいことが見つからないという不安があり、かりに今、やりたいことが見つかったとしても、将来まったく興味を感じなくなるかもしれないという不安がある。たしかに不確実である。
このような変化は、入社から退社に至るまでの会社人生の太くて確実なコースが失われ、

不確実性の世界が拡がりつつあることと関係している。まるで道なき道を勝手に進めといわれているようだ。好むと好まざるとに関わらず、見通しが悪くなるなか、自分なりの将来目標を探さなければならないのだ。が、しかし、この問題を自分だけで解決しようとすると袋小路に至ってしまうのである。

†職場＝「自分病」を解毒する場所

若者たちは、やりたいことが見つからないと言う。

でも、「やりたいことを探しているが、見つからない」って……具体的な職場から乖離した極めて抽象的な言葉だと思う。

そんなこと、たとえば松下幸之助や本田宗一郎のような極めて個性的な仕事をした人たちが思っていたはずがない。彼らに「あなたにとって仕事とは何ですか？」なんて聞いたら、具体的な経営の話とか、車の技術の話を延々とされちゃうだろう。彼らのような人たちにとって仕事とは、いま、目の前にある具体的な対象物なのである。

若者たちには「他人と違う何かを手に入れなければならない」という暗黙の前提があって、彼らは「本当の自分」を示さなければならないというプレッシャーをつねに感じている。それだから悩んでしまうのだろうが、すべての人が「本当の自分」を探したいと思っ

ているのだろうか？　私には、若者たちが「自分病」という病にかかっているようにみえる。

……誰かに憧れ、夢物語を描くが、結局現実を見て落ち込むような繰り返しを、もうそろそろ止めませんか？

「自分病」の人は、他人との違いに神経質にこだわるくせに、他人をよく見ようとしない。他人といっても具体的な職場から乖離したキラキラした偶像を見てしまう。

「自分病」からの脱出の鍵は、職場の身近な他人が持っていると思う。同僚と日常触れ合っているのに、他人の仕事経験を想像しようともしない人が多いのが残念だ。われわれが見方を変えれば、職場そのものが仕事学のテキストになるのである。

↑キャリアという視点

先に私は、経験の意味、とくに経験から学ぶ大切さについて書いた。しかし実際、他人の仕事経験にせよ、自分の仕事経験にせよ、学ぶポイントをつかむのは難しい。解答は教えず、自分で解答が導き出せるようなキッカケを教える必要がある。

そもそも学校という場所以外での学びは、本来自発的な行為であり、自発的でなければあまり効果はないのである。

私は、この本を通して「普通の仕事人生だって、じゅうぶん山あり谷ありでスリリングなんだぜ」と伝えたい。身近な仕事を考えることは、あたりまえすぎて難しいと思うけど、「多様な経験が隠れているんだぜ」と訴えたい。

あらためて自分の職場をゆっくり見回してほしい。仕事人生の魅力がかならず発見できると思う。私が、その魅力をいくつ発見できるか、そのうえでその魅力を読者に伝えられるかは、この本の勝負所である。その試みに成功しているかどうかの判断は読者に委ねるしかないが、とにかく私は、働く人、もしくは今まさに働こうとしている人に向けて語りかけてみようと思う。

とくに本書では、仕事人生の流れ、すなわちキャリアに沿う形でマンガを取り上げ、それぞれの世代がぶつかる悩みに触れながら主人公から学んだことを書いてみた。次のような章立てにしたのは、それなりに意味がある。

第1章　自分の仕事を探している若者に読んで欲しいマンガ
第2章　会社の現実にぶつかったら読みたいマンガ
第3章　会社の人間関係が複雑になってきたら読みたいマンガ
第4章　会社以外の生活を考えるために読みたいマンガ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong